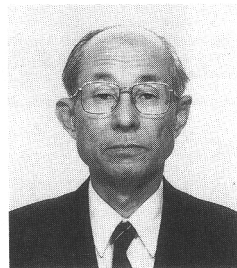


海とのふれあい



神奈川大学理学部長
東京大学名誉教授 寺本 俊彦
Toshihiko Teramoto

略 歴

1926年 京都に生まれる
1952年 東京工業大学工学部卒業
1962年 東京大学大学院修了
東京大学海洋研究所教授などを経て
1987年 神奈川大学教授

海洋学の分野における世界の趨勢とか、将来の動向とかについて述べよとの御注文である。センターのジャーナルという立場からみると、宜なる哉と思う。ところで、センターの20周年を記念して去る11月20、21日に国際シンポジウムが開かれ、世界の主要な海洋研究所の所長が招かれるという前代未聞の盛事があった。それぞれの所長が上述の趣旨を体して講演されたばかりである。大勢は大体読めたといえよう。そこで筆者としては趣をがらりと変え、海洋への係わりという観点から己れの過去をふり返ってみることで責を果たすこととしたい。平凡な一国民の記録ではあるが、そこから我が国の海への取組みの一端を伺い知ることができよう。そのような記録を幾つか集めれば、過去及び現在における我が国の海洋施策が浮かび上がろう。その評価と反省とを踏まえれば、センターとして考えるべき新たな方策や課題がおのずと明らかになると思われるからである。

私は中学2年までの幼・少年時代を琵琶湖のほとりで過ごした。小学校低学年における遠足、高学年及び中学校における夏期の水泳訓練には湖が場として選ばれた。その規模からみて、風の吹送

距離は結構長く、かなり大きな波が立つこともあり、また海岸に劣らない位の砂浜が開けているところもある。しかし、湖は湖であり、海ではない。海を持たない県に居たせいか、海洋国日本などという意識を殊更にかき立てられることはなかった。強いて探せば、国語読本で南洋群島の風俗が取上げられ、ほのかに海の香に接したり、唱歌で「我は海の子」を始め、人々に親しまれた海に関する歌が教えられたことぐらいである。

しかし、なぜか子供の頃から地べたを這いずり回る陸軍の兵隊にだけはなりたくないという思いがあった。陸軍が中心で行われた満州事変や中日戦争の影響とばかりは言えまい。国を取り巻く海への漠とした憧れが、その底にあったのであろうか。

その後、東京の中学校へ転校したが、その所在地は海から遠い三多摩。望遠鏡などを備えた天体観測ドームがあり、天文学には親しむことはできたが、海洋学との係わりは皆無。学校は海の家を館山に持っていたが利用は1年生のみ。生物の先生であった同窓の先輩から、その昔夏休みに三浦半島を跋涉し、山の上から軍港を始めとする海岸の風景を写生していて憲兵にとがめられたが、「天

下の中学生が自分の国の風景を画いてどこが悪い？」と聞き直して事なきを得たという雑談の中で、海洋の生物の話をしつめたのみ。太平洋戦争が始まって、聞いたこともない海や島の名前が報ぜられるようになり、改めてまともに太平洋の地図を眺めたことだった。もちろん、海図ではなく、島の位置や国名を画いただけのものである。緯度1°が約110 kmに当たるなどという知識さえなかった。

海について眼が開かれたのは、宇田先生の著書「海」によってであった。どうみても科学とは縁遠い、我が国の1人よがりの歴史の授業や、憑きものでもしたのかと思われたある先生の、「神ながらの道」の授業などのつまらなさに、この岩波新書をそと教科書に抱かせて盗み読みしていたのである、こうして、和達先生の「地球と人」、中谷先生の「雪」、坪井先生の「地震の話」、大谷先生の「暴風雨」などに親しんだ。一時的にせよ、戦争の重苦しさから逃れて、地球現象の世界に遊んだことだった。

海にまつわるもう一つの思い出は、1週間合宿して行われた千葉県館山海岸での海洋訓練。カッター、水泳、手旗信号、海軍体操、座学が中心。従来、学校教育の一環として行われてきた陸軍の軍事教練に対抗するものとして、海軍が初めて行ったもの。教練に比べればはるかに新鮮であり、雰囲気もよかったが、残念ながら海洋の話は全くなし。古参の大尉を長とする教師団では無理だったのかもしれない。

この頃を境にして、日本は戦争によるジリ貧からドカ貧へと落ち込んでいった。生活物資は欠乏、醤油も例外ではなかった。海水に着色した代用品が現れたのもその頃である。畜肉類は全く姿を消し、配給される蛋白食品としては大豆粕を除くと、ホッケなどの魚類。これらを通じ、皮肉なことに海との係わりが増した。そしてついに敗戦。食糧難に際し、貢献したのが鰯やサンマなどの大衆魚

と鯨肉であった。魚とともに、漁船用の焼玉エンジンなども、ポピュラーとなった。食糧資源供給の場としての海とともに、戦後、人々は、台風に伴う高潮や、洞爺丸事件のような海難を通じて海と強い係わりを持った。しかし、海についての基礎的知識の普及や啓蒙にはつながらなかった。私とても例外ではなかった。私は電気工学を学び、民間企業に入り、船用レーダーやロランを作ったり研究したりすることとなった。それでもなお、海との係わりも海についての知識も、格別増えることはなかった。このような私が、海洋学を学ぶ徒となったのは、水路部長であった須田皖次博士の「君、海洋学をやり給え」の一言によってであった。船用レーダーから航空機照準用レーダーの研究へと仕事の変更を命ぜられたとき、たまたまお話ししたのがキッカケであった。宇田先生の「海」が脳裏をかすめたことだった。

振り返ってみると、己れの至らなさもあろうが、海との係わりはいかにも薄かった。唱歌などの情緒的な面ではともかく、科学の上では余りにも疎遠であった。気候変動を含む地球環境の大きな変化や、食糧・エネルギー資源の将来に関して、我々は従前とは比べものにならないくらい、強い係わりを海と持つことが必要である。人々の海への関心を格段に高める責務を、好むと好まざるとにかかわらず海洋関係者は持たなくてはならなくなった。研究や施策を強化するうえでも、人々の理解と支援が必要である。教育や啓蒙は大学の責などと、うそぶいてはられない。社会人教育や生涯教育の一端を、センターが担うくらいの気構えをお願いしたいと思う。そして、それにも増して大切なのは、小・中・高校生などの青・少年の啓蒙である。専門家による木目の細かい実地の指導が切望される。

海洋研究を志して以降のお話をする余白がなくなってしまった。本番ともいうべきこの部分は、又の機会に譲りたい。